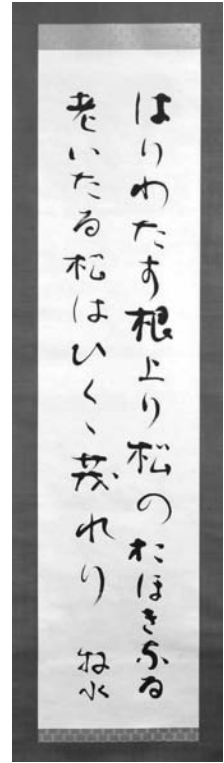


# 沼津市若山牧水記念館

第50号 平成25年3月15日 編集・発行 公益社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424  
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/



## はりわたす根上り松のおほきなる 老いたる松はひくく茂れり 牧水

根上りの松が大きく横に伸びていて、まさに老松の風格を見せている姿にすっかり感心している牧水がいる。第十三歌集『くろ土』所収の「千本松原」二十二首の中の一首である。なお、歌集では「老いたる松は」が「老いぬる松は」となっている。

歌集『くろ土』は大正十年の三月下旬の発行だが、作品は大正七年四百二十七首、同八年三百二十一首、同九年二百五十一首である。「千本松原」はその末尾に載る。牧水が沼津の「香貫の家」に移住したのが、大正九年八月十五日。移住直後は引越しの疲れで体調を崩し、歌を作り始めたのは九月の半ばで、

香貫山かぬきやまいただきに来て吾子わがことあそび久しく居をれば富土晴とれにけり

などの「香貫山」の作品はこの頃のものである。

「千本松原」二十二首は、九月半ばから年末にかけて何回か千本松原に出かけた折の作品を纏めたものであろう。

むきむきに枝の伸びつつ先垂りてならび聳ゆる  
老松おいまつが群  
千よるづの松にまじらふこの松のひたに真直ぐ  
にひたに真青まきき  
松原のしげみゆ見れば松が枝えに木こがくり見えて  
たかき富士ふじが嶺ね  
浜つづき大松原おほまつもとの際きはをなすわか松が群に夕日ゆづり  
したり

牧水が千本松原に魅せられて、その一角に五百坪もの土地を購入したのは大正十四年の二月。牧水は、沼津に御用邸のあることから、有名人の別荘地として、辺鄙な松原の外れなのに高価であったと述懐している。

その土地に念願であった自宅（「市道の家」）を建てて移り住んだのが十月五日であった。「市道の家」に移ってからは、折に触れ、松原を散策。その作品は最後の歌集『黒松』に多く載せられている。

なお、当時の千本松原について、大正十五年の秋に持ちあがった梟による千本松原の松の伐採計画に反対しての「時事新報」への寄稿文の中で、牧水は

千本松原位の見事な松が揃つてまたこの位の大きさ  
さ豊さを持つた松原は恐らく他に無いと思ふ。狩野  
川の川口に起つて、千本浜、片浜、原、田子の浦の  
海岸に沿ひ徐に彎曲しながら遠く西、富士川の川口  
に及んでゐる。長さにして四里に近く、幅は百間以  
上の広さを保つて続いてをる。

と絶賛している。

（須永秀生）

# 牧水と啄木

## 三枝昂之

(一) 友だちになるとしたら

近代を代表する歌人と友だちになるとしたら誰がいいか。そんなことを考えてみる。もちろん100パーセント遊びの、あり得ない

ことだが、さまざまな文献から見えてくる歌人像を端的に示すには意外と有効な遊びなのではないか、と感じるのである。

思いつくままに、佐佐木信綱、窪田空穂、北原白秋、斎藤茂吉、石川啄木、そして若山牧水と挙げてみる。この中から信綱と空穂は外しておこう。牧水たちが登場した明治四十年代に信綱はもう「心の花」の主筆で、早くから老大家のイメージが私にはあり、どんなふうに想像しても友人といった存在にはなりにくい。信綱は新しいものの好きで友人になれば楽しそうだが、『歌之葉』や『校本万葉集』など他の歌人にはとても不可能と思わせる歌学者という側面も思い出すと、たとえ遊び心からであっても、友人として想像すること自体が畏れ多い。

ついでだから『歌之葉』について少し補足しておく、信綱は数え年十三歳で東大古典科に入学して、その卒業論文をもとに二十一年の明治二十五年に『歌之葉』を出した。これがすごい。当時の和歌百科全書ともいえるべき大著で、手に取るとずしりと重く、二十歳

の若者にもこれほどの仕事ができるのかと感動するばかりである。

啄木の父親石川一禎は僧侶だが、浜民村周辺の人に和歌の教える在野の歌人でもあった。その一禎の座右の書が『歌之葉』だった。信綱を友人と想定すること自体が畏れ多いという気持、わかつてもらえないのではないか。

もう一人の窪田空穂は私が会った唯一の近代大家である。私の父は植松壽樹ひさきに師事していた歌人で、空穂の孫弟子といった系譜の中で歌を作っていた。当時の空穂系は人間関係が濃密で、空穂は孫弟子にも細やかな心遣いを示した。私が高校一年のときに父が他界、歌仲間が遺歌集を編んでくれたが、その序文が空穂だった。母がお礼のために雑司ヶ谷の空穂邸を訪ねる時に、そのお礼の荷物持ちとして私に同行を命じたのである。歌を作り始めていたこともあって、母は空穂に会わせてあげようとも考えたのではないか。私はただただ緊張していて、空穂の言葉は何一つ覚えていない。

つまり空穂は私の父の先生の先生。友だちなどという想定はたとえ遊びあつても、父に叱られそうで、とてもできない。

残るのは、北原白秋、斎藤茂吉、石川啄木と若山牧水ということになるが、この四人の



窪田空穂 (窪田空穂記念館 提供)



佐佐木信綱 (佐佐木信綱記念館 提供)



斎藤茂吉 (斎藤茂吉記念館 提供)

人間像をあれこれ想像してみると、まず友人として辞退したいのは茂吉である。「赤光」を読んでもいろいろなエピソードを思い出しても、キャラクターが濃すぎる。あの並外れたこだわりと集中力、そして全力投球ぶりと付きあうのはしんどい。

もう一人避けるとしたら啄木だろう。私は啄木の歌が大好きで、『啄木―ふるさとの空遠みかも』『啄木再発見―青春・望郷・日本人の幸福』と二冊出しており、啄木を愛することに関しては人後に落ちない。けれども、会う度に借金を申し込まれそうだし、自分分は天才という意識を表に出しすぎる。金田一京助のように度量が広ければ別だが、できることなら避けて生きたい。

そんなわけで残るのは白秋と牧水で、この二人はどちらも好ましいが、強いて言えば牧

水だろう。理由はごく単純である。あの澄んだ目がいい。近代以降の歌人でもっとも澄んだ目をしているのが牧水である。あの目は人を裏切ることのない目である。そう感じさせる。だから真つ直ぐに信じ、愛して、手痛い失恋をしてしまうのではないか。

啄木は早くから世慣れた男で、むしろワルだった。だから牧水のような恋の顛末とは無縁だった。キスの歌を比較すればそのことがよく分かる。同じ明治四十三年刊行の牧水の『別離』と啄木の『一握の砂』から引用してみようか。白秋も加えながら。

ああ接吻くちづけ海そのままに日は行かず鳥翔まひながら死せ果てよいま 牧水

ヒヤシンス薄紫に咲きにけりはじめて  
キスをおぼえそめし日 白秋

きしきしと寒さに踏めば板軋かきむ  
かへりの廊下の 啄木  
不意のくちづけ

牧水は明治四十一年作、白秋は「スバル」明治四十二年五月号から、啄木は「スバル」の翌年十一月号である。ほぼ同じ時代に同じ題材が詠われたのには理由がある。

和歌革新運動のなかで旧来の「恋」が否定

され、「Love」を翻訳した「恋愛」が新時代の主題として注目されるようになった。そこでおのずから「くちづけ」や「キス」も新しい時代の新語として歌人たちに意識され、歌の中によく登場するようになった。三人の歌はそうした時代の潮流と無関係ではない。

キスすると、そこで世界のすべてが止まってしまう。牧水はそう詠っている。恋愛にまだうぶな青年の高揚ぶりがオーバーな反応によく現れている。牧水ファンならもう先刻承知だろうが、安房根本海岸での園田小枝子との日々がここには反映されている。

白秋は初めてのキスをヒヤシンスの薄紫に重ねている。いかにも白秋らしく色彩感豊かでデリケートで、ここにも初々しい心震えは紛れもない。『桐の花』では

ヒヤシンス薄紫に咲きにけりはじめて  
心顫こわひそめし日

と改作され、心震えだけに焦点が絞られているが、初出も捨てがたい。いずれにしても上質な純情恋愛歌である。

これに対して啄木では世界はひっくり返らず、心もふるえない。戯れのような口づけである。この歌、料亭から帰る廊下で見送りの芸奴にキスされた場面と読む見解が多いが、

受け身だけではなく、自分からと読みたい気もする。相手をふいに抱き寄せ、くちづけをする。あるいは二人がおのずからの形で軽く求める。行為だけを述べてほとんど無感動の詠いぶりが気まぐれの行為と感じさせる。

牧水の接吻は世界がストップするほどの衝撃、啄木のそれはいわば手慣れた戯れのくちづけ。これが二人の違いをよく示している。

牧水が接吻現場の熱気を詠っているのに対して、啄木は回想歌だから熱が消えているといえるが、行為そのものが純情に程遠く、戯れの気配は消えない。戯れのキスの次に置かれた歌がそうした啄木の特徴をよく教えている。

その膝に枕しつつも

我がこころ

思ひしはみな我のことなり

酒の席での戯れか、あるいは一夜をともにした中のワンシーンか。膝枕をしても心の中に女性はいない。世慣れたワルならではの歌、と言っておこう。小枝子に対する牧水の純情一直線の恋愛は、啄木のようなワルだったらずいしない。

まだ童貞だった白秋を浅草に誘い出して童貞を捨てさせたのも啄木だった。啄木が死ん

だ時、啄木の枕元に物の三十分も端座してじつと動かなかった白秋が、眼に涙を浮かべながら金田一京助のそばにきて挨拶し、重い口を開いて「女と酒を私に教えたのは、この人この人」とその夜の話を語った。金田一がそう回想している。

歌からもこうしたエピソードからも、純情な牧水と世慣れたワルの啄木という対比は動かない。友人にするのはワルの方がおもしろそうだが、高慢ちきで、嘘が得意の金借り名人でもあつて、そんな要素を加味すると、私ならごめんである。あの澄んだ目を思い出せば、やはり友だちになるなら牧水である。酒づきあいが頻繁になりそうだが、そしてそれはそれでうれしいが、

白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけり

を思い出せば、牧水は独り酒が好きらしいから、心配無用ということではないか。

(二) 牧水は啄木を支え続けた

それでも牧水と啄木は友人だった。啄木を看取った歌人は牧水一人だったことを思い出せばそのことがわかる。啄木の遺書となった

『悲しき玩具』刊行も、牧水が土岐善磨を通じて東雲堂に働きかけた結果だった。

その牧水と啄木、いつ二人は知り合ったのだろうか。

明治四十三年の暮れ近いある夜、牧水が友人と二人で浅草を散歩していて、田原町あたりにさしかかったときに「肩の怒つた瘦形の青年と」談笑している北原白秋と出会った。そして白秋が「若山君、この人が石川啄木君だよ」と紹介して知り合ったのである。啄木研究家の吉田孤羊こようが「啄木を繞る人々」でそう紹介している。

牧水は早稲田に入学した明治三十七年の六月に同じ大学の白秋と知り合っており、同じ下宿にも住んだことがある。つまり二人は学友でもあり、旧知の仲だった。

知り合ったのが明治四十三年の暮れ近くとは遅い気もするが、『石川啄木事典』も四十三年十一月の浅草の路上、と説明しているから間違いなさそうだ。牧水研究の方からの調査があれば知りたいものである。

翌四十四年二月三日の啄木日記には「夜、若山牧水君が初めて訪ねて来た」とあり、二人の交流はこのころから本格化した。多分四十三年十二月の「一握の砂」刊行が行き来を加速させた。東雲堂発行の雑誌「創作」の



北原白秋（『牧水写真帖』から）



若山牧水（『牧水写真帖』から）



石川啄木（石川啄木記念館 提供）

明治四十四年二月号に牧水は

驚いたことには今号の本誌投稿に早々と啄木君の極く安っぽい模倣歌の表はれたことではないやな気がした、斯んな人達に啄木君の歌の本当の味は所詮解りつこはない。

と書いている。牧水が『一握の砂』に共感を抱いていたことを示す一例だろう。

しかし、二人が付き合いを始めた時期は、大きな不運が啄木に訪れた時期でもあった。病気である。牧水が啄木の家を訪ねたその七日前の啄木日記は「五六日前から腹が張つてしやうがない」と体調不良を訴えはじめている。一月三十日には勤めていた東京朝日新聞社にでかけたが、それが最後の出社でもあった。二月一日には東大病院で慢性腹膜炎と診断され、すぐに入院するように申し渡される。三日には医学生でもある友人の木下奎太郎に入院の必要性を説かれて覚悟、次の四日に手回りのものをかき集めて東大病院に入院している。

牧水が啄木を初めて訪ねたのは昼間奎太郎が入院を勧めた後だったから、大きな動揺のなかに啄木はいたわけである。牧水と啄木の交流は、啄木の病気とともにじまったことをこの経緯が教えている。

明治四十五年三月三十一日、桜が満開のこ

の日、金田一京助の一家は花見に行く支度をしていたが、読売新聞の「よみうり抄」が金田一の眼にとまった。そこには啄木のお母の消息が「母堂の逝去前より高度の熱に苦しみ居たるが数日来益々重態に陥れり」と伝えていた。

金田一は花見を中止し、すぐに久堅町ひまかたちょうの啄木を見舞い、家に戻って十円を持ち、桜の花びらを身に受けながら啄木の家に行った。

牧水が長野県の桔梗ヶ原で太田喜志子に結婚を申し込んだのはその頃だが、帰京して間もなく牧水も啄木を見舞っている。訪ねてきた啄木に啄木は「若山君、僕はどうしても死に度くない、僕は死ぬのでなくて殺されるのだ、飲むべき薬さへ飲んだら、確かに死にはせぬ」と訴えながら、薬を買う金がないだけでなく、「手許に幾らの小遣ひも無い」から『一握の砂』以後の歌をまとめていくらかの金に代えてほしいと懇願する。

牧水はさっそく翌朝、土岐哀果（善鷹）を訪ねて事情を話し、東雲堂に掛け合うよう求める。哀果よりも関係が深いはずの牧水がなぜ直接かけ合わなかったのか。前年九月に「創作」の編集を佐藤緑葉に譲っており、版元の西村陽吉に対して気まずい思いがあったからといわれる。こんなところにも牧水の人の良

さが作用していると感じる。

ともかくも第二歌集の出版が決まり、四月九日、先払いの原稿料二十円を哀果が啄木に届けた。啄木が危篤状態となった四月十三日、啄木の妻節子は朝早く金田一京助と啄木の家を俾を走らせた。牧水が着くと「若山さんがいらつしやいましたよ！」と節子は大声で繰り返した。その声で啄木は目を覚まし、かすかに笑った。そして絶え絶えの息の中で「葉も買った」「死にたくない」と告げた。啄水への訴えが歌集となり、葉代となったことをよく承知していたからである。

やがて容体が急変し、啄水は頼まれて電報を打ちに郵便局に走った。戻ると啄木の昏睡は続いており、娘の京子がその場にいらないので探し出ると、京子は門の所で舞い散った桜のはなびらを拾って遊んでいた。啄水が京子を抱いて戻ると、野辺地から駆けつけていた一禎が「もう駄目です。臨終の様です」と告げ、「九時半か」と呟いた。

君が娘は庭のかたへの八重桜散りしを拾ひうつつとも無し  
病みそめて今年も春はさくら咲きながめ  
つつ君の死にゆきにけり

「四月十三日午前九時、石川啄木君死す。」と

詞書のある四首の中で啄水はこう詠んでいる。啄木の死を惜しむように、東京には八重桜が散っていたわけである。歌は『死か芸術か』に収められている。京子はこのとき満五歳、慌ただしい人の出入りの外でしきりに散る桜の花びらと遊んでいた。啄水はそのまま一禎と二人で啄木のそばで夜を明かした。

啄木の葬儀は、二日後の四月十五日に浅草の等光寺で行われ、会葬者には夏目漱石や木下左太郎、北原白秋、佐佐木信綱など先輩や親友がいたが、啄水は朝まで寄り添っていた疲労と会場でさまざまな人と出会う苦痛を思つて欠席した。

二人の交流をこうして振り返ると、啄水は常に友人として啄木を支える側にいた。もつといえは、啄水は啄木の最後の時期を支えるために交流を始めた。その役回りを担ったのが啄水だったということが、なにか天の配剤のようにも感じる。

啄水と啄木、二人は近代以降の短歌百年の双壁といえる。万葉学者で斎藤茂吉研究でも顕著な成果をあげている品田悦一氏の調査によると、大正七年以降の旧制中学校・女学校用の教科書に作品が掲載されたベスト3は、1位啄木、2位啄水、3位与謝野晶子である。

二人の魅力をさまざまに再発見することが、これからの短歌を支えることにもなるはずである。

### 「筆者プロフィール」さいぐさ たかゆき



昭和十九年甲府市生れ。早稲田大学政治経済学部卒業。昭和五十三年「かりん」入会。平成四年歌誌「りとむ」を創刊、主宰。

昭和五十三年第二歌集『水の覇権』で第二十二回現代歌人協会賞、平成十年第七歌集『甲州百目鳥』で第七回若山牧水賞、同十八年評論集『昭和短歌の精神史』で第十四回やまなし文学賞、第十七回齋藤茂吉短歌文学賞、第五十六回芸術選奨文部科学大臣賞、第四回日本歌人クラブ評論賞、第四回角川財団学芸賞、同二十一年『啄木—ふるさとの空遠みかも』で第三十二回現代短歌大賞、同二十二年第五十九回神奈川文化賞を受賞。同二十三年紫綬褒章を受章。

歌集に『やさしき志士達の世界へ』『地の燠』『暦学』『塔と季節の物語』『太郎次郎の東歌』『天目』『世界をのぞむ家』『上弦下弦』。歌書に『現代定型論 気象の帯、夢の地核』『うたの水脈』『正岡子規からの手紙』『前川佐美雄』。

平成二十四年十月七日開催の第五十九回「沼津牧水祭・短歌大会」の講師。

第二十三回

中学生短歌コンクール

第二十三回「中学生短歌コンクール」の特選十首の表彰式が、沼津牧水祭・碑前祭の行事の一つとして、十月二十一日、千本松原の風一つなく、平穏で温かな光の中で行われた。

年ごとに参加者が増す中学生短歌は、応募数二三四二名の多きに達した。入選者五十二名の中から特選十名の作品をあげてみる。なお、選に当たったのは、青木朝子、須永秀生、杉山芳春、曾根耕一、星谷亜紀の五名である。

がんばれば俺に似ているかたつむり朝露の葉をのろのろ歩く 高橋海渡（暁秀中）  
自分に似ているかたつむりへの声援であるが、自分への励ましの言葉でもある。作者の思いが感じられる。

夏休み母の背を越え見下ろすちよつと威張れてちよつとうれしい 橋本伊織（二一中）  
母親は自分より大きいと思っていたのに、背丈が母親を超えた驚きと喜びの瞬間を詠む。

十年後一緒に仕事をしたいんだ聞いてた父の眼うるうるしてた 藤原一樹（二一中）  
息子が成人した時、「父の仕事をしたい」という言葉を聞き、眼を潤ませた父。結句の情景描写

が生きる。

「おおきに」と言われあたたまる私の心笑みがこぼれた清水の坂 鈴木真夕（五中）

「おおきに」の京都弁の一つの言葉に生まれた暖かい心情、言葉のもつ大きな力を感じさせる。

汗にじむ日が照りつける縁側で団扇の中の金魚が泳ぐ 大石愛梨（三三中）

暑い縁側で団扇を扇いでいると、団扇の中の金魚の絵も急に泳ぎだしたようで、涼しくなった。

夏の午後三者面談憂うつでにげたいけれどわずかに期待 鈴木颯人（四中）

三者面談で進学校も決まるのであろう。にげたい気持と大丈夫かなの二つが交錯した複雑な場面であらう。

縁側の日陰にごろり寝転ぶと吹き込む風は芝生の匂い 須長佳太郎（愛鷹中）

寝転んだ瞬間の風の爽やかさを詠む。青々とした芝生の上の匂いだと直感的に捉えた感性がよい。

すみきった空気の森にて安らかに鑑真眠る 唐招提寺 井原綾女（金岡中）

青い空、緑の森に囲まれたすばらしい唐招提寺。美しい自然の中で眠る鑑真への思いであらう。

天空の闇夜に浮かぶ九十九折みんなの願い 世界遺産へ 長田智樹（市立中等部）

夜の富士登山の景をとりあげ、多くの人が愛でる山を是非とも世界遺産にしたいという願望が滲む。

他のコと君が話すの見るたびにどうして心がしめつけられるの 後藤陽南（二中）  
君が他のコと話しているのを見るたびに、私は苦しくなってくるというのである。微妙な心理を詠む。

作品を読み終って感じたことは、単なる写真表現のみでなく、心象をも掬め詠んだ複雑な作品もいくつか見られたことである。（星谷亜紀）



第59回沼津牧水祭・碑前祭での表彰式  
平成24年10月21日（日）

## 第十七回若山牧水賞に 大口玲子氏の『トリサンナイタ』



(宮崎日日新聞社 提供)

第十七回若山牧水賞に大口玲子氏の『トリサンナイタ』(角川書店)が選ばれた。宮崎県在住者は初めてで、最年少での受賞となる。選考委員は、佐佐木幸綱・高野公彦・馬場あき子・伊藤一彦の四氏。

授賞式は、平成二十五年二月五日(火)宮崎観光ホテルで開催された。授賞式につづいて佐佐木幸綱氏による「富士山と牧水」の記念講演があり、翌六日、大口玲子氏の「牧水の子どもの歌」と題する記念講演が、日向市中央公民館で行われた。

大口玲子氏は昭和四十四年東京都に生まれ、早稲田大学第一文学部卒。平成三年「心の花」に入会。同十一年第一歌集『海量』で第四十三回現代歌人協会賞、同十五年第二歌集『東北』で第一回前川佐美雄賞、同十八年第三歌集『ひ

たかみ』で第二回葛原妙子賞を受賞している。

『トリサンナイタ』は第四歌集で、自身の妊娠・出産から、震災後の転居というめまぐるしい日常の中で作られた歌集である。

受賞に際し、大口氏は「歌人として、宮崎県民として若山牧水賞への大きな憧れがあったので、とても光栄に思う。これまでの受賞者はそうそうたる方々で、私でいいのか」と本当に驚いた。うれしさというより不安の方が大きく、そわそわと不思議な気持ちでいっぱい。賞の名にふさわしい歌人になれるよう、初心を忘れず努力を続けたい」と述べている。

選考委員の講評として、佐佐木氏は「切実な緊迫感のある部分と、おおらかで骨太な部分为重なり合っている歌集だ」、高野氏は「繊細な魂と強い意志を合わせ持つ人で、そこが彼女の大きさや豊かさだと思う」、馬場氏は「繊細さと骨太さが同居している点は既刊歌集にも通じるところだが、今回は置かれた状況が特殊。日本の多くの人が災害によって受けた苦悩を一人の母親として代表的に歌っている」、伊藤氏は「震災を歌った歌集が次々と出版され、それらは歌人としての力量、人間としての考えが試されていると言っている。

その中で受賞作は抜き添えた、大変優れた歌集だ」と評した。

歌集『トリサンナイタ』からの自選歌十五首中、十首を紹介する。

大粒のほたるの雨、涙のごとし産まざれば見えぬサマリアの虹

「サモア島の歌」二番まで子に歌ひ夫は寝かしつけに失敗す

紙袋に乳児捨てられし記事を読みその重さありありと抱きなほす

あかねさす日向を発ちてみはるかす夕雲の上で授乳せりけり

指さして「みづ」と言ふ子に「かは」といふ言葉教へてさびしくなりぬ

幼子へ月にうさぎがあることをまたるないことをいかに話さむ

許可車両のみ的高速道路からわれが捨ててゆく東北を見つ

晩春の自主避難、疎開、移動、移住、言ひ換へながら真旅になりぬ

いたましきもののごとくに夫は言へどかはゆし息子の宮崎なまり

雪降らばかなふ願ひと思ふとき大風呂敷を広げよ夫よ

授賞式には、本会から前年に引きつづいて、林茂樹・浅井治・長澤靖夫・三宅芳則・原悦子・大島葉子が出席した。